

マルタの出迎えと信仰の飛躍

ヨハネ福音書11:17-29

【新改訳 2017】

- 11:17 イエスがおいでになると、ラザロは墓の中に入れられて、すでに四日たっていた。
 11:18 ベタニアはエルサレムに近く、十五スタディオンほど離れたところにあった。
 11:19 マルタとマリアのところには、兄弟のことで慰めようと、大勢のユダヤ人が来ていた。
 11:20 マルタは、イエスが来られたと聞いて、出迎えに行った。マリアは家で座っていた。
 11:21 マルタはイエスに言った。「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに。」
 11:22 しかし、あなたが神にお求めになることは何でも、神があなたにお与えになることを、私は今でも知っています。」
 11:23 イエスは彼女に言われた。「あなたの兄弟はよみがえります。」
 11:24 マルタはイエスに言った。「終わりの日のよみがえりの時に、私の兄弟がよみがえることは知っています。」
 11:25 イエスは彼女に言われた。「わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。
 11:26 また、生きていてわたしを信じる者はみな、永遠に決して死ぬことはありません。あなたは、このことを信じますか。」
 11:27 彼女はイエスに言った。「はい、主よ。私は、あなたが世に来られる神の子キリストであると信じております。」
 11:28 マルタはこう言ってから、帰って行って姉妹のマリアを呼び、そっと伝えた。「先生がお見えになり、あなたを呼んでおられます。」
 11:29 マリアはそれを聞くと、すぐに立ち上がって、イエスのところに行った。

【祈りながら考えよう】

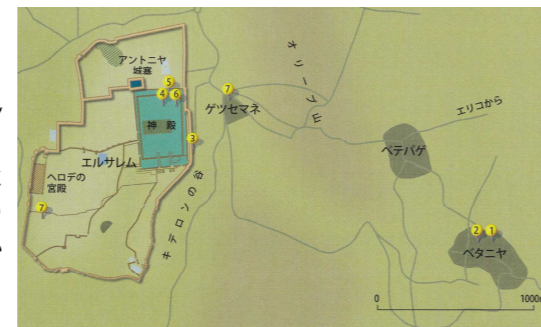
- (1) マルタは、主イエスが神であられるとはまだわかっていないことがどの言葉からわかりますか。
- (2) 終わりの日のよみがえりの時に、信者は2グループに分けられることはどうしてわかりますか。
- (3) イエスこそ、預言者たちが予告していた「神の子キリスト」であるとマルタの信仰告白が変わったのはなぜですか。

【解説】

(1) 墓の中に入れられてから四日もたっていた

イエスがおいでになると、ラザロは墓の中に入れられて、すでに四日たっていた。ベタニアはエルサレムに近く、十五スタディオンほど離れたところにあった。(17-18節)

ヨルダン川の向こうの地から、主がベタニアに来られると、ラザロはすでに墓の中に葬られてから四日もたっていた。ヨルダン川の向こうの地からベタニアまでは、徒歩で約1日かかる。ベタニアはエルサレムから15スタディオン(3キロメートル)ほどの距離であった。



(2) 兄弟のことで慰めようと、大勢のユダヤ人が来ていた

マルタとマリアのところには、兄弟のことで慰めようと、大勢のユダヤ人が来ていた。マルタは、イエスが来られたと聞いて、出迎えに行った。マリアは家で座っていた。(19-20節)

マルタとマリアの家には、大勢のユダヤ人たちが彼女たちを慰めるために、エルサレムから来ていた。まさか、まもなくその慰めが全く不要になり、嘆きの家が歓喜の家に変わることになるうとは、彼らに知るよしもなかった。

マルタは、イエスが来られたと聞いて、迎えに行った。マリアがなぜ家に残っていたのかは明らかにされていない。イエスが到着される、という知らせがまだ届いていなかったのかもしれない。それは不明である。

(3) ここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに

マルタは主イエスに会うなり、こう言っている。

「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに。」(21節)

この言葉には、いくぶん非難めいたニュアンスがある。彼女は、知らせの者を送った時、なぜ主がすぐ来てくださらなかったのかという非難を込めているように思える。

もしかしたら、彼女の中に、いくらかうぬぼれがあったのかもしれない。日頃あれだけ主に尽くして上げているのだから、何を差しおいても、飛んで来てくださるべきだといった思いがあったのかもしれない。そのような人間的な思い上がりを目を吹き飛ばしてしまわれるために、すぐには来てくださらなかった。

私たちが時としてそんな思いを抱くことがあるのではないだろうか。主のために私はこれだけの何かをしているのだから、私の祈りを何よりも優先して聞いてくださってもいいはずだといったような思い上がりである。このようなものは、主によって打ち砕かれる必要がある。

また、マルタには、主がいつ、どこにおられても、人をいやすことがおできになるという信仰がなかった。主がここにいてくださらなければ、弟のラザロはいやされなかつたのだという信仰しかなかった。

ローマの百人隊長のしもべ(マタイ8:5-13/ルカ7:1-10)やカペナウムの王室の役人の息子(ヨハネ4:46-54)に対してなされたことを知らなかつたかのである。ましてや死人をよみがえらせるというのは思いも寄らなかつた。

(4) マルタのキリスト理解

この献身的なマルタの信仰が輝きを放った。「あなたが神にお求めになることは何でも、神があなたにお与えになることを、私は今でも知っています。」(22節)

どのようにしてかはわからなかつたが、主イエスが助けてくださると信じた。神は主の願いを聞いてくださり、主は一見悲劇に見えるこの出来事から益をもたらしてくださる、という確信を持った。

しかし、この時ですら、自分の兄弟が死者の中からよみがえると大胆に信じるには至らなかつた。「お求めになる」(ギリシャ語 αἰτέω アイテオー)とマルタが使った語は、ふつう、被造物である人間が創造主に懇願したり、祈ることを表す時に使うものである。このことから、マルタのキリスト理解は、主イエスが「全能の神」であられるとはまだわかっていないことが読み取れる。彼女は主が偉大な、ただならぬ人物であると気がついてはいたが、昔の預言者たちと同等だと思っていたようである。

(5) あなたの兄弟はよみがえります

主イエスはマルタに言われた。「あなたの兄弟ラザロはよみがえります」(23節)と。彼女はこれを、終わりの日のよみがえりの約束ととった。それなら彼女も信じていたことである。「終わりの日のよみがえりの時に、私の兄弟がよみがえることは知っています。」(24節)

ラザロが終わりの日に死者の中から「よみがえる」とわかっていたが、まさにその日にそれが起きるとはマルタが予想だにしていなかったことである。

(6) わたしを信じる者は死んでも生きる

イエスはことばを続けた。「わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。」(25節) イエスを信じる者は、決して肉体の死を迎えないということではない。しかし彼を信じ、霊の内に永遠のいのちを得ている者にとっては、主の再臨の日が来るまでに、たとえ肉体的に死んでも、その再臨の日には、主は「よみがえり」として来られ、そのからだは新しい、キリストと同じ栄光の姿によみがえらされるということを意味している。

(7) 生きていてわたしを信じる者は、永遠に決して死ぬことがない

また、生きていてわたしを信じる者はみな、永遠に決して死ぬことはありません。あなたは、このことを信じますか。」(26節) さらに、救い主が来臨する時に生きていて主を信じている者は、「決して死ぬことがない。」一瞬のうちに変えられ、死者の中からよみがえった人々と一緒に天の住まいに移される(1テサロニケ4:15-17)、というのである。

それから主は信仰を試すべく、マルタに鋭く尋ねられた。「このことを信じますか。」

(8) マルタの信仰の飛躍

彼女はイエスに言った。「はい、主よ。私は、あなたが世に来られる神の子キリストであると信じております。」(27節) マルタの信仰の告白がここに認められる。そこには3つの要点が含まれる。①イエスは油注がれたメシア、キリストである。②彼は神の子である。③彼は世に来られるはずの約束の救い主である。マルタはそれ以上のことを語らない。おそらく、それで精一杯であった。

だが、彼女の生きた時代、ユダヤ人全体をおおっていた不信仰、十字架の前と後とで全く異なる人々の信仰理解といった点を考慮に入れると、それはマタイ16章16節「あなたは生ける神の子キリストです」とのペテロの信仰告白よりも進んだ、高貴で輝きのある信仰告白と見なし得る。彼女がこの告白をしたのはイエスが彼女の兄弟をよみがえらせる前のことであって、その後のことではなかつた。

(9) 姉妹のマリアを呼び、そっと伝えた

マルタはこう言ってから、帰って行って姉妹のマリアを呼び、そっと伝えた。「先生がお見えになり、あなたを呼んでおられます。」マリアはそれを聞くと、すぐに立ち上がって、イエスのところに行った。(28-29節)

ここには、姉妹のマリアに対するマルタの気配りが認められる。主イエスの到来を確認し、また主のことばによっていくぶん励まされて、マルタはイエスの到着をマリアに告げるために家に急いで戻り、マリアの顔を見、息を弾ませてこう言った。「先生が見えています。あなたを呼んでおられます。」

マリアの反応はすばやかつた。彼女はためらうことなく、「すぐ立ち上がって」、イエスに会いに出かけた。